

アバディーン大学とトロント大学時代のマッキーヴァー

——スコットランド知識人のディアスポラ——

高木俊之*

1. 本研究の目的と方法

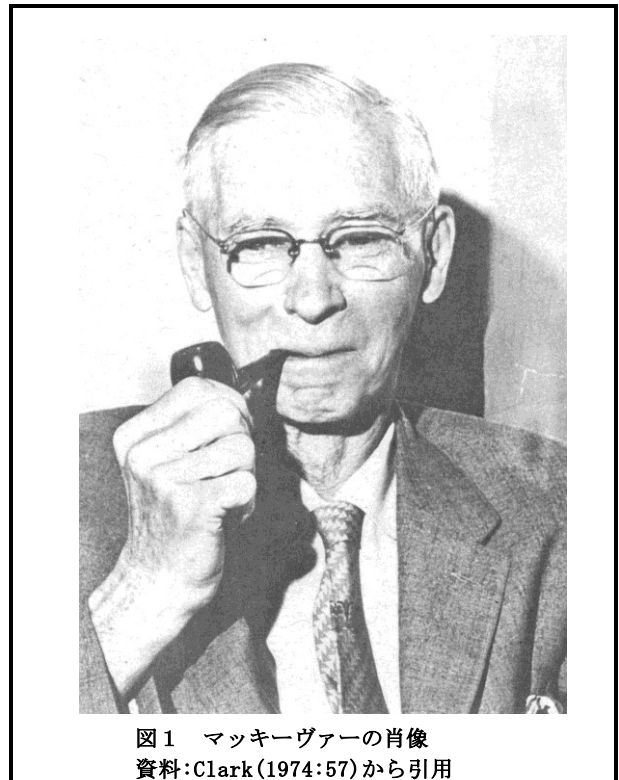
ロバート・M・マッキーヴァー (Robert Morison MacIver:1882-1970)は、その自叙伝『語られる物語のように』(以下『自叙伝』とする)の「Vita」によると、1882年¹⁾にスコットランド最北に位置するヘブリディーズ諸島ルイス島の出身でエディンバラ大学に学び、初職は1907年に同じスコットランドに位置するアバディーン大学に得た。しかし1915年にカナダのトロント大学に移り、そこで今日も社会学の古典とされる『コミュニティ』(MacIver 1917)を出版した。その後、1927年にコロンビア大学と提携するバーナード・カレッジに招聘され、1929年からはコロンビア大学大学院政治学研究科の社会学科長に就任した(MacIver 1968:249-250)。1940年にはアメリカ社会学会の会長にも選出され、没後マッキーヴァーは現代の社会学史で、いわば順調にキャリア・アップを重ねた「アメリカの社会学者」²⁾として扱われ、そのイギリス・カナダ時代は顧みられていない状況にあった。

ところが2007年5月18日、アバディーン大学ではマッキーヴァー就任100周年の記念行事が開催され(Brewer 2007a)、かつ「スコットランド思想センター」も創設された(Brewer 2014:3)。ジョン・ブレワー³⁾によると、スコットランド社会思想への関心が再び高まっていることは、スコットランドが「待ち望まれる国家(Scotland's nation-in-waiting status)」であることを反映しているからであるという(Brewer 2014:3)。

創刊された『スコットランド思想ジャーナル(Journal of Scottish Thought)』創刊号はマッキーヴァーとスコットランドの哲学者ジョン・マクマレーの特集だった。その中で、ジョン・ブレワーによって、アバディーン大学時代のマッキーヴァーの逸話が明らかにされてきた(Brewer 2007a;2007b;2014)。

本論文は、それらの逸話とマッキーヴァーの『自叙伝』やその他の著作を照らし合わせて、アメリカ移住以前におけるマッキーヴァーの足跡をカナダのトロント大学時代も含めて明らかにすることを目的とする。

方法として、アメリカ社会学史の好著(Turner & Turner 1990; Bannister 1997)のように、学説の中身は所与のものとして、社会学者の人間関係、人事関係、学会関係からある時期の社会学史を浮彫にする。言い換えて、競争の激しいアメリカ社会学者がさらされる「ストレイン(strain)」や学科や学会の「危機(crisis)」を「ドラ

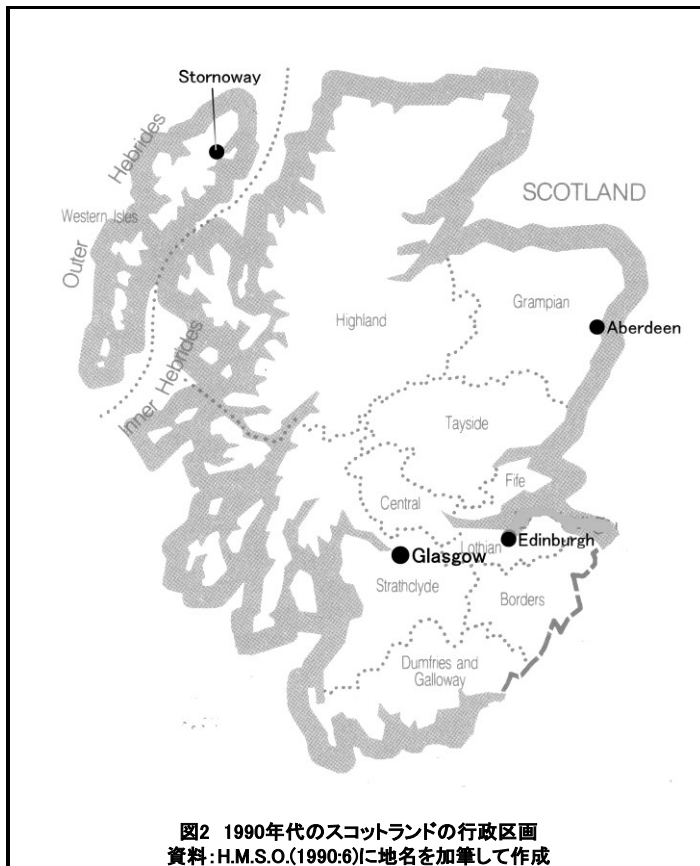


マチック(dramatic)」に描き出す「SCD 社会学史(自称)」を考えている。

2. アバディーン大学時代

2-1 アバディーンとアバディーン大学の概要

アバディーンは、スコットランド北東地方にあり、北海に面する最大の漁港都市である。ドン川とディー川に挟まれたアバディーンは王許自治都市として 1500 年にわたって繁栄を続け、今やグラスゴー、エディンバラに次ぐスコットランド第三の都市になった。ドン川南側のオールド・アバディーンに聖マハー大聖堂やアバディーン



ン大学キングス・カレッジが存する。1970 年に北海で石油が見つかり、アバディーンは油田開発の中心地となり、石油関連企業が参入し、その歳入は 15 倍になった。そのため「ヨーロッパの石油の都」と称されるようになった(照山顕人 2006:127-128)。ちなみにイギリスの社会学者 A・H・ハルゼーはその自叙伝『落胆はない』で 1990 年代に石油採掘場の玄関口となった変化を見聞するためにアバディーンを訪れたことを明らかにしている(Halsey 1996:179-186)。

なおアバディーン大学は、1495 年に「アバディーン主教でありスコットランド大法官(Bishop of Aberdeen and Chancellor of Scotland)」であったウィリアム・エルフィンストーン(William Elphinstone)によって創立された。スコットランドで 3 番目に古く、英国で 5 番目に古い歴史ある大学である。人文学、神学、カノン法(canon:教会法)、市民法など、よく知られている学問のあらゆる分野が網羅された。1892 年にはすべての学部に女性が入学できるようになった⁴⁾。

2-2 政治学の担当講師として

先にマッキーヴァーは、順調にキャリア・アップを重ねたと述べたが、実はそのアバディーン大学退職について、ジョン・ブレワーは、「餓首(sack)とまではいかなくても、今なら間違いなく発展的解雇(constructive dismissal)と呼ばれるでしょう」(Brewer 2007a:5)と述べている。その経緯について検証する。

まずマッキーヴァーは、チューターの紹介でアバディーン大学の政治学講座に招かれた。講師として採用されたアバディーン大学キングス・カレッジの人文学部(Arts faculty)は、中世からの伝統がある 7 つの科目に一人ずつ教授職があり、講師は教授会には参加できず、所属する教授に全面的に依存していた。

『アバディーン大学史 1495-1895』によると、かつてスコットランドの大学には「リージェンティング(regenting)」と呼ばれる教育システムが採られていた。それは、一人の教員が学生の全教育課程を受け持つものであった。科目が教えられる順序は、現代的な方法とはまったく逆で、一般原理から始まり、特定の事実に至るというものであった。1549 年のキングス・カレッジの訪問記によれば、リージェントは神学者で、論理学を教え始め、物理学と自然哲学に進み、算術、幾何学、天文学(cosmography)、道徳哲学、政治経済学、経済学で終わるものであった。リージェントはまさに、歩く百科事典でなければならなかった(Bulloch 1895:61)。また、カ

ノン法（教会法）は、当時、生活のあらゆる部門における教会の影響力の観点から重要な科目であり、公会議の決定や教皇の勅令によって定められたものであった(Bulloch 1895:62)。

もちろんマッキーヴァーの時代にはリージェンティング・システムではなくなっていたが、過去の伝統からアバディーン大学は、イギリス国教会を土台に、古典的な学問を重視していた大学であることは確かである。さて、マッキーヴァーは「道徳哲学(moral philosophy)」の教授の下で学生のエッセイを採点するなど、教授を補佐する役目もあった。社会科学に関しては経済学と政治学があるだけで、後者は伝統的にマキャベリからヘーゲルまでの有名な人物の教義を説明する内容だった。マッキーヴァーが担当した政治学のクラスは、かなり優秀な学生で構成された小さなグループだったという (MacIver 1968:64-65)。

アバディーンで、当初マッキーヴァーは「保証人であり上役である(my sponsor and superior)」道徳哲学の教授との良好な関係を持った。教授は大きな屋敷で一人で暮らすのが嫌で、何週間もマッキーヴァーを招いては泊めてくれた。時には午後にゴルフをし、時には夜間にチェスをした (MacIver 1968:70-71)。



図3 当時の絵葉書になったアバディーン大学・キングスカレッジ
資料:著者所蔵

ここでマッキーヴァーの所属講座である「道徳哲学」について、ジョン・ブレワの興味深い指摘を紹介する。それによると、スコットランドの啓蒙思想とは、スコットランド社会における文化的多様性と、いくつかの分野にまたがる知性的な広範さを併せ持つものであった。そこで、スコットランドの大学における「道徳哲学」講座は、現代の用語で言えば、建築学、都市計画学、人類学、心理学、経済学、社会学、神学、地理学、法学、言語学、政治学、哲学などであり、当時、これらの知的探求はすべて「道徳哲学」という名称の中で行われていたという (Brewer 2014:8)。

大河内一男によると、グラスゴー大学で「道徳哲学」を講義したフランシス・ハチソンは、倫理学のみならず自然神学や自由主義的な経済論においてアダム・スミスに感銘を与えたことを指摘している(大河内 1968:18)。そして、アダム・スミスの『道徳情操論』と『国富論』も当時「道徳哲学」という名称で呼ばれていた包括的思想体系の部分なのである(大河内 1968:28)。このように「道徳哲学」という学問は、スコットランドにおいては独特な位置づけをされる学問であることに留意すべきである。

2-3 社会学の講義を創設する

マッキーヴァーは、この時代の社会科学は学問的に尊敬されず、未発達分野だったと回想する。特に社会学は、識者たちからは埒外とされ、「ろくでなしの名前を持つ、ろくでなしの準学問(a bastard, quasi subject with

a bastard name)」とみなされていた。純粋な学者は、ギリシャ語とラテン語を半分ずつ使ったタイトルを軽蔑していた。それは、「はっきりしないアメリカ中西部(the woolly American Midwest)」で流行したテーマで思われていた(MacIver 1968:65)。英語の「バスタード(bastard)」は、「にせ物、いやな野郎」というかなり侮辱的な意味を持つ。マッキーヴァーはその言葉を二回繰り返していることから、スコットランドでの社会学に対する位置づけがわかる。

そうした中、マッキーヴァーは社会学という卑下された科目をカリキュラムに取り入れることを望んだ。先に述べたように、道德哲学教授と非常に良い関係になったので、マッキーヴァーが政治学と社会学の講師になるように説得することに成功した。その教授の支持のもと、1911 年からこの提案は実現した。実は、スコットランドの大学で社会学がカリキュラムに組み込まれたのはこれが初めてで、マッキーヴァーがアバディーン大学を去った後、この科目は姿を消し、再認識されるまで半世紀がかかった(MacIver 1968:72-73)。

2-4 実質的解雇

その後、マッキーヴァーはある朝、教授と共用の執務室 (retiring room) に入り、いつものように挨拶をしたが、何の反応も貰えなかった。教授は机に座ったまま、顔を上げず、一瞥もくれなかった。2 回目も試みたが、同じ結果だった。途方に暮れた私は、そのままオフィスを出て、授業の時間まで待った。それ以来、彼と有意義な会話を交わすことはなかった。仄聞によると、その理由は、マッキーヴァーがベルナル・ボザンケ(Bernard Bosanquet:1848-1923)の『国家の哲学的理論(The Philosophical Theory of the State)』を批判する論文を発表したからであるという(MacIver 1968:74)。

マッキーヴァーが批判したボザンケは、自分の立場を擁護しつつも、非常に親切な返事を書いている。このことがきっかけで、ボザンケと非常に興味深く、楽しい文通をすることができた。両者の間に交わされた手紙の束は、今日まで大切にしているという(MacIver 1968:74)。この文通については後述するが、ボザンケ自身がマッキーヴァーの批判を個人的攻撃と受け取っていないことは確かである。

政治学者の芝田秀幹によると欧米では 2007 年頃からバーナード・ボザンケが再評価されている。そのボザンケは、セント・アンドリュース大学の道德哲学教授を短期間(1903-1908)務めたのみで、基本的には在野の哲学者だった。ボザンケはイギリスで一元的国家論を展開したことで知られ、それを批判したハロルド・ラスキや G・D・H・コールは多元的国家論や政治的多元主義を主張したことで研究が盛んに行われたが、ボザンケに関する研究はこれまで皆無に近かった(芝田 2008:34-37)。前出のボザンケ『国家の哲学的理論』は、その国家を重視する思想をヘーゲル流国家主義・全体主義・あるいはファシズムの思想的温床として位置づけられ多方面から批判された(芝田 2008:38)。後に多元主義的国家論を展開したマッキーヴァーが、ボザンケを批判したのは当然の流れである。

上記のようにボザンケの著書はヘーゲルの教義に基づいており、件の教授もヘーゲルの信奉者だった。マッキーヴァーは夢にも思わなかったが、彼はその論文を自分への攻撃と受け止めたようである。ここでマッキーヴァーの最初の職は、ブラックリストに載るような結末(ending with me in the black books)を迎えたので、次の職に役に立つような推薦を、その教授から得ることは不可能になった(MacIver 1968:74-75)。

近年になってジョン・ブレワーがアバディーン大学の資料を調べたことによると、1915 年にマッキーヴァーをアバディーン大学から解雇した件の道德哲学教授はジェームズ・ブラック・ペイリー (後のジェームズ卿) で、1902 年から 1924 年の間アバディーン大学の教授を務めた後、リーズ大学の副学長に就任した人物である。彼は『自叙伝』が書かれる前の 1940 年に亡くなっていたが、マッキーヴァーその実名を最後まで公表しなかった(Brewer 2007b:5)。

2-5 ボザンケとの往復書簡

ボザンケ批判の検証を続ける。マッキーヴァーは、1911 年 1 月に『哲学評論(The Philosophical Review)』に「社会と国家」という論文を執筆した。その主張を以下に要約する。

「国家制度(state-institutions)」とは蜂の巣の六角形のように、無意識の協力の本能によって構築されるものではない。国家制度の基礎となる意志は、「意識的な意志、すなわち市民の意志(a conscious will, the will of the citizens)」でなければならない。哲学者が、その意識的意志に合理性や普遍性を求めることは許されるが、どのような事実も、他の事実のより大きな合理性によって説明されることはない。国家にとっても、どのような制度にとっても、意志という事実は、意識的な個人の意志から生じる共通の意志という事実にすぎないのである(MacIver 1911:33)。

この内容はボザンケへの批判を通じた、ヘーゲル批判であることは明らかである。マッキーヴァーは、国家の意思を否定して、市民の意志の重要性を説いている。「国家と社会」ではなく「社会と国家」という題名からもその姿勢を窺うことができる。

さらに、この論文をきっかけに、マッキーヴァーはボザンケだけでなく政治学者ヘルンレも交えて次のような往復書簡を交わしている。

1911年1月31日 ボザンケから マッキーヴァーへ	あなたが社会と国家を区別したことは、私も重要だと思う。現実の意志と実際の意志について、あなたは明らかに間違っていると思う。意志が二つであると同時に一つであることは、疑いの余地がないように思える。
1911年3月12日 ボザンケから マッキーヴァーへ	「国家」についてのあなたの難点はわからない。社会全体は、国家の中に、そして国家を通してでなければ存在しない。国家だけが社会全体の目的を意識し、すべてを調査し、すべての細部をそれに合わせるのだ。
1911年4月24日 マッキーヴァーからボザンケへ	私は国家が最高の社会であることを否定しているわけではない。しかし、それでも私は、「社会」は国家よりも偉大であると考えている。もはや国家が倫理的目的を支配したりするとはいえないのである。例えば国家は家族をあらゆる側面から管理することができるだろうか？
1911年6月19日 ボザンケから マッキーヴァーへ	私たちが直面しているのは、「外側」と「内側」の関係だと思う。すべての「内なるもの」は、その「外なるもの」から大きな影響を受け、またその「外なるもの」に影響を与える。この影響の様式と程度に関する問題は、人間の人生において最も興味深く、難しく、危険なものである。
1912年3月23日 ボザンケから マッキーヴァーへ	私たちの間の相違は割合や視野の角度の違いであり、実質的に同意できる部分が非常に多いと感じている。しかし、私には、あなたが事実を理解しているように見えず、必ず生じる問題に対処するための真の準備を怠っているように見えるのが気がかりです。
1912年4月12日 ヘルンレから マッキーヴァーへ	ボザンケには、しばしば他の人々を最も困惑させる難問を存在しないものとして扱うという、独特のトリックや心の癖があることにお気づきだろうか。多数意志と少数意志の実際の衝突になると困難が生じるというあなたの発言を全面的に支持したい。
1912年4月25日 マッキーヴァーからボザンケへ	あなたは、国家間には仲裁を受けるにはあまりに深い相違があると言う。仲裁的国際裁判所とは、国家ではなく、高い司法能力から選ばれた代表によって構成される裁判所を意味する。このような高い人格と高潔さを備えた代表を、地球上の文明国家すべてに見つけることは可能である。

表1 マッキーヴァー、ボザンケ、ヘルンレの往復書簡

資料: MacIver (1969:238-247)から要約して作成

これを読むとボザンケは国家と意志に関して自説を枉げていないことがわかる。マッキーヴァーは書簡を通じて、国家と社会の区別、家族のことも論じつつ社会の意義を再認識して、国家間の意志の衝突には国際的裁判所を設けるべきと主張している。その際にヘルンレはマッキーヴァーを支持したことに心強く思っただろう。しかし、このような内容を公表したことによって、実質的解雇になることから、この時代のスコットランドの大学には学問の自由は存在していなかったと見ることができる。

3. トロント大学時代

3-1 トロント大学政治経済学科へ

先に述べた事情で、アバディーン大学講師の地位を継続することができなくなったマッキーヴァーは、新しい職を見つける必要に迫られた。この頃、エディンバラ大学のジェームズ・セス(James Seth)教授は、カナダのトロント大学政治経済学科に空席があることを知っていた。マッキーヴァーはその応援を得て応募し、やがてトロント大学の政治学担当准教授に採用され、翌年に就任することになった(MacIver 1968:75)。したがって、マッキーヴァーがトロント大学に職を得ることができたのは僥倖であって、決して招聘による採用ではなかった。

ところが、マッキーヴァーはトロント大学に移って間もなく、「自由奔放な資本主義の弊害」に対して発言したため、「危険な急進派(dangerous radical)」として解雇されそうになった。彼に対する非難(the campaign against him)には、学長のロバート・ファルコナー卿が、「大学は思想について予見や予断を持つべきではない(universities should have no prescribed or proscribed ideas)」と述べ、学問の自由を自ら守るきっかけを作った(Brewer 2007b:11)。このことから、こと学問に関する限りマッキーヴァーは、イギリス紳士の性格をはみ出した舌禍も辞さない性格だったことが垣間見ることができる。ファルコナー学長については、後述する。

ここまで述べたことはマッキーヴァーの個人的な事情によるカナダ移住であるが、ジョン・ブレワーによると、これはスコットランド人の国際的ディアスポラの一環として、スコットランド社会学の知的移動として強調する価値があるという(Brewer 2014:17)。

先に述べたように、18世紀から19世紀にかけてのスコットランドの社会思想は広範かつ学際的であった。それが道徳哲学から社会科学が分離していく過程で、いくつかの社会科学の出現に貢献した。そして、20世紀初頭には、社会科学という学問分野が出現し、それが世界的な規模で行われ、スコットランド知識人の雇用の場が世界中に広がったのである(Brewer 2014:15)。その向かう先は北米大陸が有力であったが、アメリカ合衆国だけでなくカナダもその対象だったのである。

3-2 スコットランドの知識人のディアスポラ・ネットワーク



図4 当時の絵葉書になったトロント大学・ザソルジャーズタワー

資料:著者所蔵

アーサー・ハーマンの『近代を創ったスコットランド人』によると、そのカナダを独立に導いて、後に首相になったジョン・マクドナルドはグラスゴー生まれで、1820年にオンタリオ州に移住した人物である。またカナダ実業界の3分の1がスコットランド出身だった(Herman 2001=2012:379-380)。加えてカナダの高等教育をスコットランド人が主導したことを、ハーマンは「高度の知的能力を持つ『ヘザーの息子』を少なくとも一人も見いだせないような専門学校や大学はひとつもない(There is not a college or University in Canada, where at least one ‘son of the heather’)」と表現した(Herman 2001:368=2012:380)。言うまでもなくヘザーはスコットランドを象徴する植物である。

そのハーマンによると、カナダのダルハウジー大学(1818年設立)、マギル大学(1821年設立)、トロント大学(スコットランド人によって1827年設立)は、スコットランド教育の基礎的諸原理と、トマス・リードとドゥーガルド・スチュアートという常識哲学の二大唱道者を神聖なものとして大事にしていたという(Herman 2001=2012:380)。

ジョン・ブレワースの指摘に戻ると、スコットランドの知識人のディアスポラ・ネットワークは、カナダを必然的に選択したのである。先に、マッキーヴァーを応援したエディンバラ大学教授のジェームズ・セスは、自身もカナダのノヴァ・スコシア州(The Province of Nova Scotia)のダルハウジー大学にかつて在職していた(Brewer 2014:17)。このノヴァ・スコシアという州の名が新しいスコットランドを意味することは言うまでもない。かつて19世紀のスコットランドのハイランド地方のクリアランス(囲い込み)で、土地を奪われたスコットランドの農民(crofters)がカナダに移住したことはあったが、知的ディアスポラは、規模こそ同じでないにせよ、より劇的である(Brewer 2014:17)。

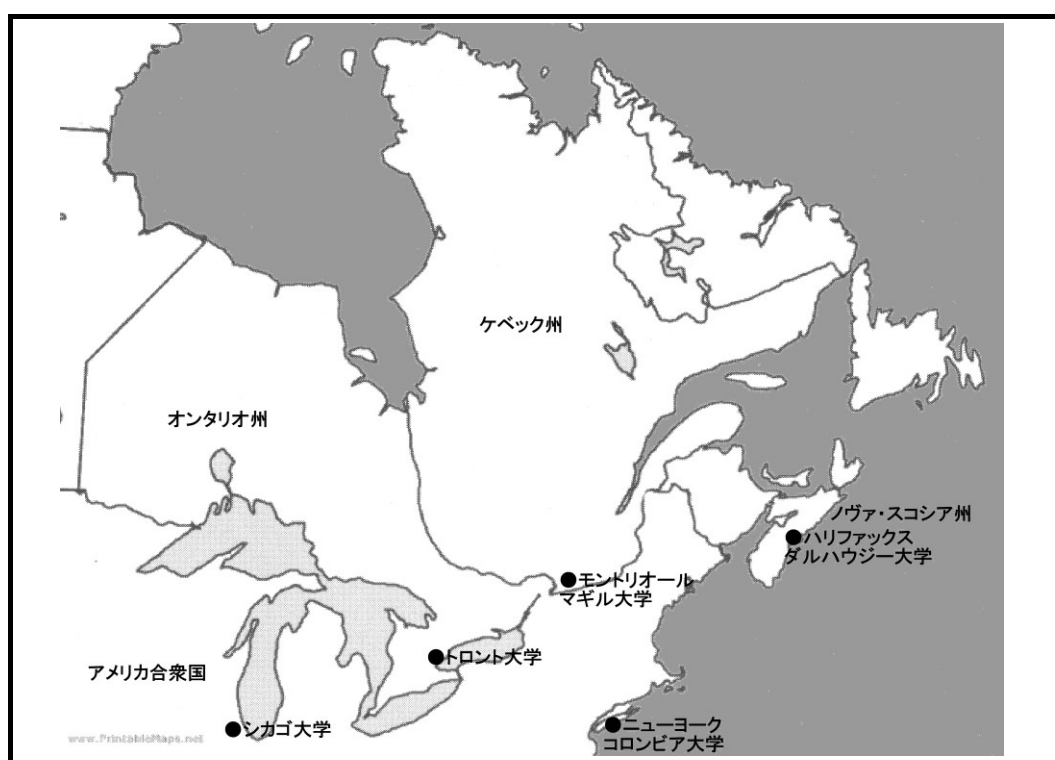


図5 スコットランドやマッキーヴァーと関連する北米大陸の大学
資料: printablemapsHP から「カナダ白地図」⁵⁾の一部を加工して引用

その理由は、当時のトロント大学は、そのアメリカ化に対する懸念から、初期の創立者たちは意図的にイギリスから教員を採用していたからなのである。初代学長はアイルランド人(前トリニティ・カレッジ・ダブリンのジョン・マッコール)であり、マッキーヴァー就任時の学長はシャーロットビル生まれの長老派聖職者

(Presbyterian clergyman)のロバート・ファルコナー卿(Sir Robert Falconer)だった。ファルコナー卿は頻繁に教員採用のためにイギリスの地を偵察していたと評されている。そのためトロント大学にはスコットランド人が考古学、人類学、民族学の分野で活躍する長い伝統があった(Brewer 2007a:6)。

マッキーヴァーは、そのファルコナー卿に懇願されて、併設された社会福祉学科(School of Social Work)の運営も任された。非常に有能な助手の助けもあって、必要なことを成し遂げることができた(MacIver 1968:89)。

図4に示されたカナダ東部の州は、実は大西洋を隔ててスコットランドに向き合っている。そうした地理的な関係だけでなく、D・G・クレイグトンによるとイギリス領時代のカナダ諸州は「領地」というよりも、大洋を越えたイギリスの政治的・文化的共同体の中の州であると看做されていたということもある(Creighton 1960:101)。

3-3 マッキーヴァーのカナダ研究とシカゴ学派への関心

マッキーヴァー自身のカナダ観を見てみよう。それによると、トロントが位置するオンタリオ州では、スコットランドと北アイルランドのグループが支配的でもあり、カナダでの生活への移行には苦勞しなかった。しかし、彼が味わった受け入れ態勢は、本当の意味での帰属意識には発展しなかったともいう。カナダ人は共通の伝統に縛られることなく、カナダの状況に関連した感情によって一体感を得ているのであり、最も浸透していた感情は、唯一の隣人であるアメリカに対する防衛的な感覚であると看做していた。マッキーヴァーはカナダでの生活を楽しみ、良い友人もできたが、永遠に続く暖かさは得られなかったとも言っている(MacIver 1968: 78-79)。

より重要なことは、トロント大学採用後、マッキーヴァーの研究に対する姿勢に画期的変化があった。マッキーヴァー自身は『コミュニティ』後の研究を、「労働組織や人口変動に関するちょっとした研究に手を出した」(Odum 1951:196=1955:286)と述懐したが、それは帰納的な実証研究に取り組んだことである。第一に、先進国の出生動向に関して論文を書いている。その冒頭に以下のように述べている。

民主主義のプロセスは「同化(assimilation)」のひとつである。それは階級の壁を取り払い、経済的な違いが許す限り、すべての階級が同じような習慣、風俗、衣装、娯楽、信仰形態を採用することを意味する。……中略……、共通の技術が文明全体を貫き、すべての階級が同じような環境で暮らし、同じような問題に直面する。しかし、民主主義の条件下では、この同化の法則に例外が一つある。ある重大な側面において、階級間の格差は縮まるどころか広がっている。この60年間で、さまざまな社会階層(social strata)が持つ出生力は、著しい乖離を示しているのである(MacIver 1926:287)。

マッキーヴァーは「同化」というシカゴ学派のキーワードを用い、「階級」と「階層」を使い分けている。マッキーヴァーは、このように最新のアメリカ社会学の分析視角を取り入れるのに敏感であった。そして、僅かであるがカナダのケベック州とオンタリオ州といった地域別の比較研究を行っている。

それによるとマッキーヴァーは、ヨーロッパのカトリック諸国と非カトリック諸国を比較して、前者が後者よりもはるかに高い出生率を維持していることを指摘する。そしてカナダについて、カトリック信者の多いケベック州では、1922年の1,000人当たりの出生率は35.57人であったのに対し、プロテスタント信者の多いオンタリオ州では24人だった。第一次世界大戦や戦後の混乱を考慮すると、宗教的信条よりも一般的な文明の影響の方が、出生率低下に強い影響を与えていることは間違いなさそうだと述べている(MacIver 1926: 298)。

周知のように、ケベック州にはフランス系住民が圧倒的多数を占めていることがその背景にある。州別に「モザイク」を構成しているカナダにおける出生率の分析は、デュルケームの『自殺論』の分析を彷彿させるものであるが、マッキーヴァーはデュルケームのいう「社会的事実」を認めていないため、カナダ社会の分析がこれ以上深められていないのが残念である。

さらにマッキーヴァーは、そのカナダ時代にシカゴ学派の研究に関心を持っていた証左をあげる。それは、社会福祉の分野における最近の進歩に注目してもらうために、マッキーヴァーは大学の主催で短期間の公開講座のシリーズを企画したことである。最初の講演者には、シカゴのハルハウスで有名なジェーン・アダムスを招いた。

ところが、講演会の案内が届いた後、戦時中の平和主義者であるアダムスに反対する人たちから抗議が届いたのである。そこで学長から「大学は年次補助金に依存する地方機関であり、政治的な影響を懸念しているので、講演を中止するように」と忠告を受けたがすぐにキャンセル決めなかった。しかし、講演会の直前になって、学長は退役軍人の団体から、「もし講演会が開かれたら、それを滅茶苦茶にする(they would break up the meeting if it were held)」という決定的なメッセージを受け取ったと言う。これはゲストにとっても危険なことかもしれないことから、マッキーヴァーは彼女にひたすら謝るしかなかった(MacIver 1968:89)。

3-4 『カナダとその偉大な隣人』調査

それとは別にマッキーヴァーは、コロンビア大学に移ってからカーネギー財団の援助を受けて、カナダとアメリカの関係を研究するプログラムを開始し、『カナダとその偉大な隣人(Canada and Her Great Neighbor)』(Angus edited 1938)という著作を完成させた(MacIver 1968: 79)。その内容をマッキーヴァーによる「プロジェクトの要約」から振り返ってみよう。

同書は、ある民族が別の民族に対して表明したさまざまな意見を整理し、そして、その民族の他者に対する態度を明らかにし、これらの態度や意見がどのような反応であるのか、その状況を明らかにしようとするものである(MacIver 1938:xxiii)。具体的にはカナダの6つの特徴的な地域を調査した。①沿海州、②フランス語圏のケベック州、③ケベック州の少数派の英語圏、④オンタリオ州、⑤プレーリー州、⑥ブリティッシュ・コロンビア州である(MacIver 1938:xiv)。

そのまとめ役として沿海州はダルハウジー大学哲学教授 H・L・スチュワート教授、フランス語圏ケベック州担当は、モントリオール大学事務局長エドゥアール・モンペティ氏、英語圏ケベック州担当は、S・デルバート・クラーク氏である。S.デルバート・クラーク氏(元マギル大学社会学部、現マニトバ大学)は、現在のカナダの社会・経済運動を注意深く研究している人物である。オンタリオ州はトロント大学政治経済学部のアレクサンダー・ブレイディ教授。ブリティッシュ・コロンビア州は、ブリティッシュ・コロンビア大学経済学・政治学・社会学・商学部長である H.F.アンガス教授が担当することになった(MacIver 1938:xv)。

カナダにおける意見と態度の一般的分析	
第1章	カナダとカナダ国民
第2章	過去の遺産
第3章	カナダの社会制度におけるアメリカの影響
第4章	教育
第5章	映画
第6章	ラジオ放送
第7章	アメリカ定期刊行物文学
第8章	カナダの新聞
第9章	経済組織
第10章	カナダの国民感情と帝国感情
第11章	沿海地方とモントリオールの新聞社
第12章	オンタリオ州の報道 1920-1934年
第13章	ウィニペグの新聞社1931-1934年
第14章	議会での討論
第15章	書籍と評論
第16章	学校の実態
第17章	ケベックにおける英語に関する意見と態度
第18章	マニトバ州農村部の意見と態度
第19章	ブリティッシュ・コロンビア州における意見と態度

表2 『カナダとその偉大な隣人』目次

資料: Angus edited (1938)から作成

さらに地域的な調査に加え、カナダ全土を対象とした特別調査も行われた。その主なものは、一流の新聞記者

で作家でもある J・A・スティーブンソンが担当した新聞と定期刊行物の調査と、ブリティッシュ・コロンビア大学の F・H・ソワード教授が指揮した学童の意識調査であった(MacIver 1938:xv)。この計画には、インタビューやアンケートによって、時間と資源の許す限り多くの地域、条件、グループを代表するような民衆の意見や態度を直接調査することが含まれていた(MacIver 1938:xiv)。同書の 19 章 451 ページにわたる構成は表 2 の通りで、歴史と経済に加えて、地域研究と教育とマス・コミュニケーションまでもが含まれる幅広い総合調査である。

マッキーヴァーが要約した調査結果によると、カナダ人のアメリカに対する意見や態度は、アメリカ人のカナダに対するそれよりもはるかに明確に提示され、明確であること(MacIver 1938:xii)。カナダ人は、法律や政治形態、文化、美德の自国の優越性を主張することが一般的である(MacIver 1938:xiii)。しかし、アメリカ人に対して「友好的」、「寛大」、「もてなし好き」、「実用的」、「機知に富んでいる」、「民主的」、「進歩的」と好ましい「特徴を示す形容語(epithets)」の選択にもコンセンサスがあった(MacIver 1938:xvi)。

そして、「アメリカ人個人は好きだが、集団としては好きではない(likes Americans individually, but not collectively.)(MacIver 1938:xvii)」というカナダ人の対米態度は、深い意味で敵対的なものではなく、むしろ防衛的な自己主張であり、国境を越えて発せられる文化的影響や経済的統制の重みに対抗する姿勢を保とうとしているのである(MacIver 1938:xix)。

3-5 カナダの社会構造

その後、カナダの本格的な社会学的調査は、「カナダ社会学の父」と呼ばれ(Harrison 1981:13)、後にトロント大学に社会学科を創設したことで知られるサミュエル・デルバート・クラーク⁶⁾が進めた。それによると、カナダにおいてイギリス人、スコットランド人、アイルランド人が旧世界に対する忠誠心を維持することは、カナダ人の植民地的な態度を永続させ、アメリカの影響力の拡大を阻止することにつながったと述べ(Clark 1950:386)、その本質を「アメリカに移住したイギリス人は急いで善良なアメリカ人になろうとしたが、カナダに移住したイギリス人は善良なイギリス人のままでいることが奨励された(in Canada he has been encouraged to remain a good Briton)」と絶妙に表現した(Clark 1950:387)。

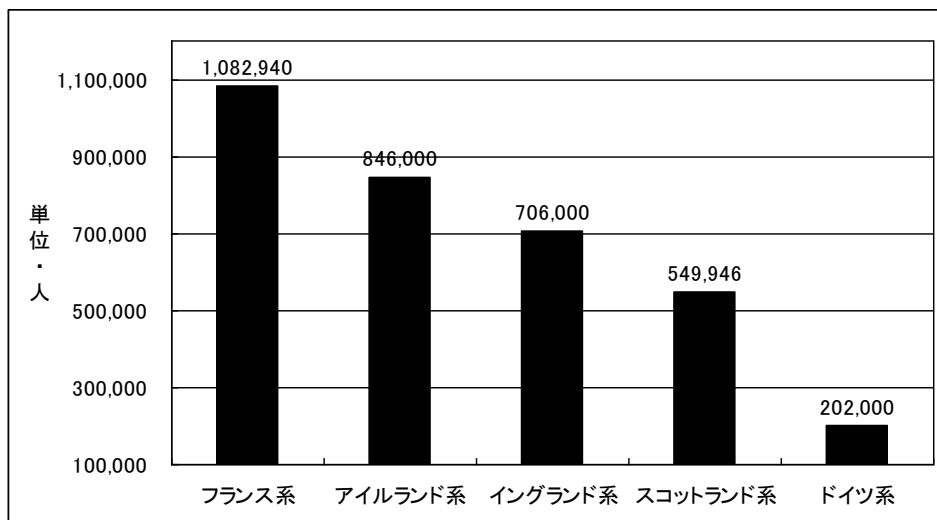


図 6 第 1 回カナダ国勢調査(1871 年)による出身地の構成

資料:(Canada Year Book, Handbook and Library Division, Dominion Bureau of Statistics prepared, 1967:82-83)から作成

カナダ連邦成立時の人口は約 350 万人であったが、図 6 に見られるように、連合後の最初の国勢調査 (1871 年) で、今日のカナダを特徴づける地域別のエスニシティ構成が、すでに顕著なまでに確立されていた。その点

について、カナダ人社会学者のキャスパー・ニージェル(Kaspar D.Naegle)によると、カナダ社会の特色をなす「モザイク」とは、アメリカの「人種の坩堝(melting pot)」という比喻と区別するためであると同時に、少なくとも理論的には、集団としての個別性を維持する権利に対する一般的な信念(at least in theory, a general belief in the right to sustained collective individuality)を表明するための概念である(Naegle 1964:514)。

こうしたことの傍証として第一次世界大戦の「カナダ遠征軍(Canada Expeditionary Force:CEF)」には、トロント第3大隊(トロント連隊)、ウィニペグ第8大隊(リトル・ブラック・デビルズ)、モンリオール第13大隊(ロイヤルハイランダーズ・カナダ)、ビクトリア第16大隊(カナディアン・スコティッシュ)など出身地やエスニシティを呼称につけた部隊が編成された。トロントでは、スコットランド人の在郷軍(militia)が「第75(ミシサガ)大隊」として編成され、ヨーロッパに派遣された(Stewart 2017:53-54)。

これらのことから、イギリスやカナダにおける在郷からの志願兵による部隊編成が、かつての日本陸軍の仕組みと大いに異なっていることがわかる。ちなみにマッキーヴァーはアバディーン大学時代に同僚に説得されて、正規軍の志願兵補助機関であるテリトリアルズに少尉として入隊した。ゴードン・ハイランダーのキルトを誇らしげに振り回して行進した。しかし、1、2年すると職業軍人の態度に反発を覚えるようになり、銃剣の訓練もいやだったので辞めたという(MacIver 1968:69)。もちろん、マッキーヴァーはカナダでは軍隊に志願しなかった。

マッキーヴァーには、カナダのように個別性を有したモザイクとしてコミュニティが形成されるのか、アメリカ合衆国のように個別性を溶かし込んで坩堝としてコミュニティが形成されるのとは、いかなる相違が見られるかをもっと研究してほしかった⁷⁾。しかし、それができなかった理由について、マッキーヴァー没後に書かれたカナダ人社会学者の意見を振り返ってみることにする。

3-6 カナダ人社会学者デルバート・クラークによるマッキーヴァー評

デルバート・クラークによると、今世紀の社会科学者で、マッキーヴァーほど偉大という称号を強く主張する人物はほとんどいないという。マッキーヴァーは哲学者であり、ヒューマニストであり、リベラルで人道主義的な深い信念を持ち、人との交わりを愛し、ハイキングや水泳、奇妙な種類のキノコを狩るなど、人生の単純な楽しみを愛する人であった。カナダで発展した政治学の哲学的・理論的伝統の強さの一部は、彼の影響によるものとも言えるかもしれないが、カナダにおける社会学という学問分野の発展については、マッキーヴァーはほとんど影響を与えなかったとしている(Clark 1974:59-60)。以下にその具体的交流についての証言を繙くことにする。

私がマッキーヴァーに初めて会ったのは1933年のことだった。彼は当時、カーネギーによるカナダ・アメリカ関係研究の指導を引き受けており、最終的にはH.F.アンガスの編集のもと、『カナダと偉大な隣人』⁶⁾として出版されることになった。それは彼にとってカナダの学界との最後の出会いであり、楽しい思い出はほとんど残っていない。1年ほどして、彼は研究の「監修(direction)」を断念した(Clark 1974:59)。

そもそも、彼はこの問題に関わるべきではなかったのかもしれない。マッキーヴァーは、哲学的な探求から一転して、少年非行や人種差別といった問題を共感的に考察することはできたが、歴史に対する優れた感覚を持ち合わせておらず、この感覚を欠いたままでは、カナダという国や社会を本当に理解することはできなかったのである(Clark 1974:59)。

没後の追悼としては手厳しい内容である。デボラ・ハリソンによると、クラークの構想した「カナダ固有(土着)の社会学(An indigenous Canadian sociology)」とは、南側に迫り来る怪物に抗して、カナダはどのように生き延びてきたのか。カナダ最大の問題は、国家としてその生存であるという認識につながっているのである。それはアメリカの構造的機能主義のように、非歴史的に描かれた社会制度への個人の適応ではなく、むしろ集団や社会の集団的な生活を、時間を超えて生き延びる能力という観点から捉えることである。したがって、カナダ固有の社会学は歴史的なものであり、個人ではなく社会の変化について自らを占めている(Harrison 1981:14)。これが、クラークの指摘するマッキーヴァーの歴史認識の欠如であると考えられる。

3-7 トロント大学の政治経済学科長として

マッキーヴァーのトロント大学政治経済学科長を振り返ってみることにする。『トロント大学政治経済学科の歴史 1888-1982』によると、1921 年から 1922 年にかけて前任のジェームズ・メイヴァーが休暇に入ったので、マッキーヴァーが代行になり、1 年後に学科長に就任した。マッキーヴァーが学科のスタッフに採用したのはアレック・ブレイディの他は、短期間勤務した 2 名だけである(Drummond 1983:53)。

マッキーヴァーは、自分の所属する部局に誇りを持つようになり、トロントの生活のレクリエーション的な側面が好きになったと語っている。しかし 1927 年、ニューヨークのバーナード大学に経済社会学部長として招かれたとき、その誘惑はあまりにも大きかった。バーナードでは 2 つのコースを教えるだけで、そのうちの 1 つは社会学である。経済学を教える必要はなくなった。後に、ユニバーシティ・カレッジの「学長(principal)」としてトロントに戻るチャンスを与えられても、マッキーヴァーはそれを断った(Drummond 1983:53-55)。

3-8 マッキーヴァーのアバディーン大学復帰の可能性

先にマッキーヴァーは、大学教員として初の地位を実質的に解雇されたことについて触れた。マッキーヴァーにとっては、痛恨の出来事で、トロント大学に移ってから名誉挽回のチャンスを狙っていた。

その点について、ジョン・ブレワーによると、マッキーヴァーは 1920 年に LSE の政治哲学教授で同じスコットランド人であるグラハム・ウォラス(Graham Wallas)に手紙を書き、スコットランドでの人事があればリストに加えてほしい(keep MacIver abreast of any appointments)と頼んでいた(Brewer 2007a:7)。マッキーヴァーは、スコットランドについて両義的な想いがあるようである。

そして、トロント大学のアーカイブには、1920 年から 21 年にかけてのマッキーヴァーとのやりとりが収められており、その中にはマッキーヴァーがアバディーン大学から政治経済学科の新しい講座への復帰を打診されていたことが明らかにされている。1920 年 7 月 4 日付の手紙には、スコットランドに戻った彼が、大学の学長と会って講座のことを話し合い、学長はマッキーヴァーに進展を知らせることを約束したと書かれている。翌年 6 月 21 日、マッキーヴァーはアバディーンから、再び学長と会ったことを書き送っている。しかし、1921 年 7 月 1 日、故郷のストーノウェイから出された別の手紙では、政治経済学教授と学科長に就任したので、「今年中にはトロントを離れられない」と説明している。しかし、1922 年まで延期するという学長の申し出を受け入れることは可能であると書き、復帰の可能性を残していた。しかし結局、マッキーヴァーはアバディーン大学の熱意には応えられなかった(Brewer 2007a:7-8)。

マッキーヴァーは 1921 年にはミネソタ大学教授へ就任する可能性もあったが(Bannister 1987:130)、もしアバディーン大学に復帰していれば、イギリス社会学の柱石になっただろう。

3-9 スコットランド・ディアスポラの現代的意義

・親または祖父母にスコットランドの市民権を持つ者	スコットランド市民として登録可能(証明のための証拠提出が必要)
・合法的にスコットランドに滞在している移民	スコットランド市民として帰化申請することができる(善良な人柄、居住地、およびスコットランド移民法に規定されるその他の要件を満たすことを条件とする)
・スコットランドに10年以上居住し、スコットランドと継続的な関係がある者	

表3 スコットランド市民権案(2014 年)
資料: McCrone (2017:508)から要約して作成

2014 年 9 月に実施されたスコットランド独立国民投票は、投票率 85%で、賛成は 45%、反対は 55%で否決されたが、それが今「EU 再加盟」とセットで再燃しているという。イギリス全体では EU 離脱が多数を占めたが、スコットランド市民は 62%が残留に票を投じたのである(『朝日新聞』2024 年 9 月 23 日朝刊 4 ページ)。すなわ

ち、独立の暁には、スコットランドは EU に再加盟しようというのである。北海油田を有するスコットランドは経済を土台に政治的独立の可能性を未だ諦めていないのである。

そこで、独立の際にスコットランド政府が、スコットランドに類縁のある人口を 4 千万人から 5 千万人とし、スコットランドに住む人の数を大きく上回るとすれば、スコットランド人のディアスポラは「民族的」定義ではなく「市民的」定義が重要となってくる。2014 年 9 月のスコットランド独立国民投票の際、スコットランド政府は、表 3 に見られるように、スコットランドで生まれた人、スコットランドに住んでいる人、そしてそれ以外の背景を持つ人にも、仮のスコットランド市民権を与える意向を表明した。これは独立の際にスコットランド政府が「スコットランド人」とみなす可能性のある人物を示しているのである。

4. 結論

本論文の知見として以下の 4 点に要約する。

- ① マッキーヴァーがアバディーン大学を退職してトロント大学で採用されたことは、決して招聘されたものではなかったこと。
- ② マッキーヴァーは、トロント時代にカナダの実証研究に取り組んだが、カナダ固有の社会学を構築するまでには至らず、アメリカ社会学を吸収した素地の上にコロンビア大学に招聘された。
- ③ フランス啓蒙思想と異なりスコットランド啓蒙は、日本の社会学者には、これまで社会学の起源として必ずしもみなされなかった。しかし、スコットランド「道德哲学」の分解がスコットランド知識人のディアスポラとともに、社会科学や社会学としてアメリカ・カナダに伝わったと考え、その認識を新たにすることがある。
- ④ 加えて、2014 年以降のスコットランド独立運動の高まりとともに、スコットランドのアイデンティティの一つとして、スコットランド発の社会学を研究する意義も未だ失われていないと指摘する。

謝辞

本論文は、第 97 回日本社会学会大会報告「アバディーン大学時代のマッキーヴァー——スコットランド知識人のディアスポラ」(京都産業大学 2024 年 11 月 9 日)の内容を文章化して加筆したものである。

「学史・学説」部会の会場では、イギリスでの社会学の位置づけ、スコットランド啓蒙のヘーゲルに対する影響と、逆に 20 世紀になってもヘーゲルがスコットランドの思想に影響を与えているのか。ヨーロッパ社会学ではスコットランド啓蒙が社会学の起源に認められている。スモールなどアメリカ社会学に対する、アダム・スミスやスコットランド啓蒙の影響はもっと広がりをもっていたのでは、など多数の質問をいただいたことに感謝する。

注

- 1) 1882 年は、和暦明治 15 年生まれとなる。日本人社会学者なら高田保馬(1883-1973)、戸田貞三(1887-1955)に近い生年である。
- 2) 高城和義によると、1934 年にアメリカ国籍を得たという(高城 1992:368)。
- 3) ジョン・ブレワー(ジョン・ブルーア)は、クイーンズ大学 HP によると『北アイルランドの宗教・市民社会・平和』(2011)などの著書を持ち、主に北アイルランドの紛争について社会学の立場から研究している。2004 年～2013 年にアバディーン大学教授、その間の 2009 年～2012 年にはイギリス社会学会の会長に選ばれた。2013 年からはベルファストのクイーンズ大学教授をつとめ現在名誉教授である。
(<http://www.qub.ac.uk/research-centres/iscts/Staff/ProfessorJohnDBrewer/>)2024 年 4 月 14 日閲覧。
- 4) アバディーン大学 HP「history」(<https://www.abdn.ac.uk/about/history/our-history.php>)(2024 年 8 月 3 日閲覧)から引用。
- 5) printablemapsHP から「カナダ白地図」
(<https://www.printablemaps.net/north-america-maps/canada-maps/maps/CANADA-province-outlines.pdf>)から一部に地名を加筆して引用 2024 年 4 月 15 日閲覧
- 6) デボラ・ハリソンによるとサミュエル・デルバート・クラークは、ハロルド・イニスの教え子であり、イニスはカナダ社

会科学におけるナショナリスト運動の最前線にいた人物である。この運動は 1930 年代にトロント大学の政治経済学部に定着し、クラークはそこから生まれた唯一の主要な社会学者であった。クラークはカナダで最初社会学者ではないにせよ、明確にナショナリストであった最初社会学者である。クラークに対してどのような批判がなされようとも、クラークがカナダの社会学に与えた貢献ほど、その国の学問の発展に根源的な貢献をした社会学者はいないという(Harrison 1981:13)。

7) アメリカ社会学者から見たアメリカとカナダの類似点と相違点は、遙か後年になってマッキーヴァーが再興したコロンビア大学大学院に学んだセイモア・マーチン・リップセットが『革命と反革命』(Lipset 1968=1972)などで、その解明に努力することになる。リップセットは 1946 年からトロント大学の社会学講師に採用されたことも(Lipset 1969:153)、巡り合わせとして興味深い。

引用文献

- Angus H. F. ed, 1938, *Canada and her great neighbor : sociological surveys of opinions and attitudes in Canada concerning the United States*, The Ryerson Press.
- Bannister Robert C., 1987, *Sociology and scientism : the American quest for objectivity, 1880-1940*, University of North Carolina Press.
- Brewer John D., 2007a, An Introduction to MacIver at Aberdeen: Robert Morrison MacIver Centenary Conference University of Aberdeen, 18 May 2007:1-9 アバディーン大学 HP(<http://www.abdn.ac.uk/uploads/soc197>)2024 年 3 月 31 日閲覧.
- _____, 2007b, “We must protest that our inheritance is within us: Robert Morrison MacIver as sociologist and Scotsman”, *Journal of Scottish Thought*, Vol 1, No1:1-23.
- _____, 2014, The Scottish Enlightenment and Scottish Social Thought c.1725–1915 in Holmwood John & Scott John edited *The Palgrave handbook of sociology in Britain*, Palgrave Macmillan:3-29.
- Bulloch John Malcolm, 1895, *A history of the University of Aberdeen, 1495-1895*, Hodder and Stoughton.
- Canada Year Book, Handbook and Library Division, Dominion Bureau of Statistics prepared, 1967, *Canada one hundred 1867-1967*, Queen's Printer, 1967
- Clark Samuel Delbert, 1950, The Canadian Community, in Brown George W. ed, *Canada*, University of California Press & Cambridge University Press.
- _____, 1974, “Robert Morison MacIver: 1882-1970”, *Proceedings of the Transactions of the Royal Society of Canada*, Series 4. Vol.12:57-60.
- Creighton D G., 1960, The Dominion: Genesis and Integration, in Brown George W. ed, *Canada*, University of California Press & Cambridge University Press.
- Drummond Ian M., 1983, *Political economy at the University of Toronto: A history of the Department, 1888-1982*, Faculty of Arts and Sciences, University of Toronto.
- Halsey A. H., 1996, *No discouragement : an autobiography*, Macmillan.
- Harrison Deborah, 1981, *The limits of liberalism : the making of Canadian sociology*, Black Rose Books.
- Herman Arthur, 2001, *How the Scots invented the Modern World : the true story of how western Europe's poorest nation created our world & everything in it*, Three Rivers Press(守田道夫訳, 2012, 『近代を創ったスコットランド人——啓蒙思想のグローバルな展開』昭和堂).
- Lipset Seymour Martin, 1968, *Revolution and counterrevolution : change and persistence in social structures*, Basic Books(鈴木広 [ほか] 訳, 1972, 『革命と反革命 : 歴史の断絶と連続性を考察した《国際比較研究》』サイマル出版会).
- _____, 1969, Socialism and sociology, in Irving Louis Horowitz edited *Sociological self-images : a collective portrait*, Sage Publications.
- MacIver R M., 1911, Society and State, *The Philosophical Review*, Vol. 20, No. 1 (Jan., 1911):30-45(「新ヘーゲル学派の『社会』と『国家』の同一視批判」中久郎・松本通晴訳, 1975, 『コミュニティ——社会学的研究: 社会生活の性質と基本法則に関する一試論』ミネルヴァ書房).

- _____, 1917, *Community : a sociological study : being an attempt to set out the nature and fundamental laws of social life*, Macmillan(中久郎・松本通晴訳, 1975, 『コミュニティ——社会学的研究: 社会生活の性質と基本法則に関する一試論』 ミネルヴァ書房).
- _____, 1926, *Trend of population with respect to a future equilibrium in Dublin* Louis I. ed, *Population problems in the United States and Canada*, Houghton Mifflin, Riverside Press.
- _____, 1938, “Foreword” in Angus H. F. ed, 1938, *Canada and her great neighbor : sociological surveys of opinions and attitudes in Canada concerning the United States*, The Ryerson Press.
- _____, 1968, *As a tale that is told : the autobiography of R.M. MacIver*, University of Chicago Press.
- _____, 1969, *Politics & society*, ed Spitz David, Atherton Press.
- McCrone David, 2017, *The new sociology of Scotland*, SAGE.
- Naegle Kaspar D., 1964, *Canadian Society : Further Reflections*, Blishen Bernard R. et al., 1964, *Canadian society : sociological perspectives* [Revised ed], Macmillan Company of Canada Limited.
- Odum Howard W., 1951, *American sociology : the story of sociology in the United States through 1950*, Longmans Green(横越英一訳, 1955, 『アメリカ社会学』 法政大学出版局).
- 大河内一男, 1968, 「アダム・スミスと『国富論』」大河内一男責任編集『アダム・スミス』(世界の名著 31) 中央公論社: 5-58.
- 芝田秀幹, 2008, 「B・ボザンケとR・M・マッキーヴァー」『沖縄法学』(37): 33-81.
- Stewart Timothy J., 2017, *Toronto's Fighting 75th in the Great War: A Prehistory of the Toronto Scottish Regiment (Queen Elizabeth The Queen Mother's Own)*, Wilfrid Laurier University Press.
- 高城和義, 1992, 『パーソンズとアメリカ知識社会』 岩波書店.
- 高木俊之, 2022, 「ゲマインシャフトとアソシエーション——テンニース、ギディングス、マッキーヴァーにおける社会集団」『東海大学紀要 教養学部』第 52 輯: 25-38.
- _____, 2023, 「マッキーヴァー社会学の成立と発展 ——「マックレイカー」の社会学者 R・パークによる批判を契機として」『東海大学紀要 教養学部』第 53 輯: 69-86.
- _____, 2024a, 「マッキーヴァーと 1930 年代のコロンビア大学——ASR クーデター、ロバート・リンド、フランクフルト学派」『社会学論叢』第 206 号: 61-79.
- _____, 2024b, 「20 世紀転換期のイギリス社会学者たち——パトリック・ゲデス、レオナード・ホブハウス、ロバート・マッキーヴァー」『東海大学紀要 教養学部』第 54 輯: 57-70.
- _____, 2024c, 「コロンビア大学社会学科の興亡 1894-1927——ギディングス、オグバーン、マッキーヴァー」『社会学論叢』第 207 号: 1-21.
- _____, 2025, 「オグバーンと語られざるシカゴ学派 1927-1933——ロバート・パーク、ルーサー・バーナードとの葛藤」『社会学論叢』208 号: 39-58.
- 照山頭人, 2006, 「アバディーン」木村正俊・中尾正史編『スコットランド文化事典』原書房: 127-129.
- Turner Stephen Park & Turner Jonathan H., 1990, *The impossible science : an institutional analysis of American sociology*, Sage Publications.